

様式3 令和7年度 小金井市立 本町小 学校 自己評価まとめ

学校教育目標 心身共に健康で、旺盛な好奇心と寛容の心をもち、多様な人と協働的に関わりながら、先行き不透明な時代を明るく前向きに切り拓いていくことのできる児童の育成を図るために、次の目標
 ◎強い子 ○やさしい子 ○考える子 ○はたらく子

目指す学校像(ビジョン)

【目指す学校像】

みんなが誇りに思う本町小

【目指す児童・生徒像】

◎強い子 (しなやかで折れない心と立ち直る力をもち、積極的に人と関わりながら主体的に課題解決できる子) ○やさしい子 ○考える子 ○はたらく子

【目指す教師像】

○子供の心に寄り添い、使命感をもって根気強く指導に取り組む教師 ○授業で勝負するプロフェッショナルとして、研究・研修に励む教師 ○組織、社会の一員として、自ら課題を見出し積極的に職務を遂行する教師

前年度までの学校経営上の成果と課題

「主体的」に焦点を当て、一人一台端末を活用しながら、授業変革を進めることができた。また、コミュニティ・スクールとして、保護者、地域と連携・協働し、児童の積極的に人と関わろうとする気持ちを高めることができた。認め、褒め、励ます指導を基本とし、自己肯定感を高めることを通して、しなやかで折れない心と立ち直る力を児童に育てていくことが課題である。

	具体的方策		課題と対策		第2回評価		成果と次年度以降の対策
	努力目標	成果目標	努力目標	成果目標	努力目標	成果目標	
授業変革の推進	発達段階に応じて、学習内容や学習する相手、学習するペース等を児童自身が選択できるような複線型の学習に取り組む。	3	4	児童が学習の中で学ぶ方法や内容を選択できる「複線型」の授業は、児童の肯定的評価90%と高い評価を維持している。校内研究や自己申告授業の機会に児童の「主体的な活動」に視点を当て、児童が学習内容や学習する相手、学習するペース等を選択できる複線型の授業変革を推進し、児童の自律的な学びに引き続き取り組んでいく。	4	4	児童アンケートの肯定的評価が91%、保護者アンケートの肯定的評価が93%と共に高い評価となっている。校内研究や自己申告授業の機会に教職員同士で学び合ってきたことで、児童が学習内容や学習する相手、学習するペース等を選択できる複線型の授業が、本町小の学習スタイルとして教職員・児童に定着してきた。引き続き、児童の自律的な学びの質をさらに高めるための指導の充実に取り組んでいく。
	一人一台端末を活用し、児童が情報共有したり考えを深めたりするような活動を各教科で実施する。	2	4	故障機と予備機の不足により十分な活用が難しい時期があった。児童全員に配備し、活用を更に促進していく。学習の共有や考えの交流において不可欠な道具である一方で、ノートやプリントでの手書きと端末での文字入力のパランスを考慮し、引き続き一人一台端末を活用した「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実を図っていく。	3	4	児童アンケート「クロムブックを使って考えたり友達と交流したりする学習は楽しいですか」の肯定的評価が98%と高い評価になっている。11月末に新しいクロムブックが全員に配備されたことで、児童にとっての利便性がさらに高まっている。ICT機器ありきで日常的に活用する段階から、賢い文房具として主体的に選択・活用し、デジタル社会をよりよく生きる力を養うデジタルシチズンシップ教育をさらに推進していく。
子どもの権利の尊重	認め、褒め、励ます指導を徹底するとともに、児童の声や意見をよく聞き、教育活動に生かしていく。	4	4	児童の主体性を重視し、様々な場面で児童の思いが反映される活動が行うとともに、児童のよさを多面的な視点から見出し、自己肯定感を高め、安心して挑戦できる環境を整えている。児童の肯定的評価が95.2%と高い評価である一方、30人の児童が否定的な回答をしている。個々の児童の様子を適切に把握し、対応していく。	4	4	教員アンケートの最も肯定的な評価が昨年の52%から69%に増えている。児童の名前を呼んで褒め、良い言動を価値付けする言葉掛けを行うことを全教職員で取り組んだことで教員の意識の向上につながった。一方で、「褒められ大切にされている」と感じていない児童の数は中間と同様である。引き続き、児童の心に届く言葉掛けや適切な評価を行うことで、自己肯定感を高め、安心して挑戦できる環境を整えていく。
	年3回のアンケートやWEB-QU等で実態をつかむとともに、ふれ合い月間を中心に全校でいじめ撲滅への取組を行う。	4	4	「嫌なことをされず楽しく学校に通っている」質問への児童の肯定的評価は91%。ふれあい月間で「ピンクシャツデー」を行い、学校全体が温かい雰囲気にもまれる素敵な企画に育っている。年3回のアンケートやWEB-QUの情報を教職員で共有し、いじめの早期発見、学校いじめ対策委員会を中心とした組織的取り組みにより未然防止と早期解決を図っている。	4	4	児童アンケート「嫌なことをされず楽しく学校に通っている」の肯定的評価は中間と同様に高く、ふれあい月間では、代表委員会による児童主体の企画も定着してきて、いじめは許さない風土がある。ただ、10%の児童が否定的な回答をしている。個々の児童の様子を適切に把握し、対応していくためにも、日常的な情報交換・共通理解を心掛け、全ての児童が全ての大人に相談できるような組織的な対応の充実にも努めていく。
地域連携の推進	近隣の大学や地域の人材、施設等と連携してゲストティーチャーを招聘し、専門性を生かした学習を行う。	1	4	今年度から日本語指導が始まり、東京学芸大学に協力を得た指導プログラムに取り組んでいる。一学期は「小金井子どもオプンズパーソン」から子どもの権利に関する授業を6年児童が受け、児童の声や意見を聞く体制の充実を図っている。現時点の実施率は56%だが、二学期以降、本町ゆめ広場の学習を通して、地域人材やゲストティーチャーを多く招く予定。	4	4	昨年度から、「笑顔と学びの体験活動プロジェクト」の実施校として、6年生の周年行事への取組、5年生の防災教育の炊き出し体験、4年生のデファスリートによる障がい者理解教育、3年生の阿波踊り、1年生の絵本作家やコマ名人など、様々なゲストティーチャーによる専門性を生かした体験型の学習を実践している。児童アンケートの肯定的評価も94%と高い評価である。引き続き、地域や関係機関との連携を大切にし、充実させていく。
	図書、芝生、学校生活支援、放課後子ども教室、地域未来塾、開校60周年関連行事、本町ゆめ広場等の地域と連携した取組を活性化させる。	4	4	開校60周年行事や本町ゆめ広場等の取組を通して、学校や地域への愛着を深めることが目標に、更なる地域連携に取り組んでいる。コミュニティ・スクール3年目として、地域のイベントへの参加が増え、学校と地域の距離が近くなっている。ポランティア評価では、更なる活性化のアイデアを多く寄せていただいたり、少しずつ具現化に努めている。	4	4	保護者・地域と協力し、フェスティバル・式典・集会と続いた開校60周年行事学校を成功させることができた。地域との一体感が感じられる、10年に一度の幸せな雰囲気にも包まれた行事を通して、児童の学校や地域への愛着を深めることができた。東京学芸大学との連携や地域未来塾の拡充など、年々コミュニティスクールとしての取組が充実している。今年度は多摩科科学技術高校との連携も加わり、地域と共にある学校づくりを今後も推進していく。
特色ある学校づくり	体力テストの結果をもとに体育の授業改善を行い、運動の日常化につながる授業を実施する。	3	3	体力テストの結果を基に、児童の実態に即した授業改善を行い、体力の向上を図っている。「学校2020レガシー」として、なわとびや持久走などの体育的活動の充実、外遊びの奨励を通して、楽しみながら運動に親しむ態度を育成している。二学期は6年生が「東京世界陸上体験プログラム」、4年生が「デフリンピック参観」を通して運動への関心を更に高めている。	4	4	6年生「東京世界陸上体験プログラム」、4年生「デフリンピック参観」の本物に触れる機会を通して運動への関心は確実に高まった。持久走やなわとび等の全校での取組や自分のめあてに沿って楽しく体力の向上を図る体育の授業の充実にも努めている。児童アンケートでは、「すずんで体を動かすこと」への肯定的評価が5ポイント増え、94%と高い評価である。異学年交流の「みんな遊び」などの機会もあり、休み時間に元気に校庭で遊ぶ姿が見られる。
	東京学芸大学と連携した森林教育や海の移動教室での体験を生かした環境学習等、環境を教材とした学習を行う。	2	3	小金井市気候非常事態宣言を受け、東京学芸大学と連携した森林教育や校庭芝生を活用した環境学習を通して、環境問題を自分事として捉え、自らできる取り組みを考えて実践する態度を育成している。一学期には高学年の林間学校や移動教室と関連した環境学習を通して、児童の主体的な環境に関する取り組みを行った。	3	3	今年度の9月からエコ委員会が発足し、中学校と連携した古着リサイクルプロジェクトやリサイクルの物作りワークショップなど、児童による主体的な取組を実施した。3学期も児童発信の企画が計画されている。また、中間報告にある移動教室における環境教育以外に、4年社会科や高学年の家庭科の単元でも、「ハチドリプロジェクト」の自分事としてできることを考え、実践する学習活動を行っている。引き続き、日々の授業から指導の充実に取り組んでいく。
	特別支援教室専門員、特別支援教育支援員、別室指導支援員、支援ボランティア、SC、SSW等と連携し、個に応じた指導を充実させる。	4	4	特別支援教育コーディネーターと不登校支援コーディネーターを中心に関係者間で密に連携し、きめ細やかなサポートに取り組んでいる。東京学芸大学の学生が別室指導や日本語指導のボランティアとして支援に入り、個々の教育的ニーズに応じた合理的配慮と個に応じた指導の充実を図っている。	4	3	日本語指導教室における東京学芸大学協力の指導プログラムの一環で、教授による教職員に向けての研修も実施できた。外国籍の児童が増えている中、市内唯一の設置校としての良さを生かして全教職員の学びの機会となっている。学芸大学と連携し、学生ボランティアの活用にも力を入れたことで、より多くの人材を活用して個々の教育的ニーズに応じた合理的配慮と個に応じた指導も充実してきた。保護者アンケートの肯定的な評価も85%から89%と着実に増えている。
	教職員が児童の手本となり、積極的に挨拶をするとともに、保護者・地域とも連携しながら、進んで挨拶する児童を育てる。	4	4	「一往復半」の挨拶を推奨し、挨拶を褒められた児童の名前を校長室前に掲示し全校朝会で紹介する取組を行っている。5月には月間で延べ1,000人を超える児童が挨拶を褒められるなど、挨拶からコミュニケーションの輪を広げる児童が目に見えて増えている。挨拶はコミュニケーションスキルの第一歩として、各学年での指導を一層充実させていく。	4	4	校外学習で関わる施設の方や、地域の方に児童の気持ちの良い挨拶を褒められている。さらに、保護者アンケートの肯定的な評価がこの3年間で89%→92%→96%と増加している。保護者や地域の皆様にも本町小学校の挨拶の取組が定着し、「一往復半の挨拶」が学校の看板の一つとなっている。児童が自分たちの学校の伝統と自信をもって言い続けられるように、引き続き、指導の充実に取り組んでいく。